

一、次の文章を読み、後の（1）～（3）の問い合わせに答えなさい。

【H16】

「ある人が、梅雨の晴れ間のある夜、川の土手に沿つた道を歩いていた。月は薄い雲につつまれ、草におりている露は宝石のように輝いていた。」

芦もまばらにかる沢の、あやめも分ぬところに、堤を沿ふて白犬あり。礎をもつて追へばひたもの逃ぐ。静かにゆけば犬も静かに、とどれば犬もとどまれり。かくて追ふと思ひつつ、十四五町ゆくに、一声ほゆる事もなし。それより江の堤には沿はず、我ゆくみちは横なりしに、犬見えずなる。こはいかにと又もどのかたへもどりて見れば犬あり。①ふしきのおもひをなすに、何の別の事もなし。濁水にくもりし月の影うつろひしなり。犬と思ひしときは月と見えず。月とがてんして、なにほど犬に見なさんとせしかども、犬とはかつて見えざるなり。②一念の赴くところいなものにて、十四五町③まよへり。しりて後は、④まよふて見んと思ひしかども、まよはれずとかたれり。

(『御伽物語』による)

(注) 芦もまばらにかる沢：芦をまばらに刈り取った水辺。

あやめも分ぬ：者の区別もつかないこと。

礎：小石　ひたもの：ひたすら

十四五町：およそ千五百メートル。

いかに：どうしたことか。　別の事：特別なこと。

(1) 文章中の――線部①に「ふしきのおもひ」とあるが、

文章中の「ある人」が不思議なことと思うようになった

直接のきっかけはどのようなことであつたか。その説明

として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記

号を書け。

ア、どんなに追い払つても、逃げることもなく

犬がつきまとつてくること

イ、横道にそれると犬は見えなくなるが、

もとのところにもどると犬が見えること

ウ、静かに歩いていくと犬も静かに歩き、

立ち止まると犬も立ち止まること

エ、物の区別もつかないところに、白い犬が

いるのが見えること

(2) 文章中の――線部②の「一念の赴くところ」は、すつかり犬と思いこんでいたといふことである。文章中の「ある人」は、何を犬と思いこんでいたのか、適切なもの

のを次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、流れれる水が立てる白い波  
イ、月を包んでいる薄い雲  
ウ、まばらに刈られた芦の影  
エ、濁つた水に映つた月の光

(3) 文章中の――線部③の「まよへり」を現代仮名遣いに直して、――線部全部をひらがなで書け。

(4) 文章中の――線部④に「まよふて見んと思ひしかども、まよはれず」とあるが、このことを具体的に述べてある文を文章中から探し、その初めの三字を書け。

一、次の文章を読み、後の（1）～（3）の問い合わせに答えなさい。

【H17】

①今は昔、比叡山の山の西塔に実因僧都といふ人ありけり。小松の僧都とぞ言ひける。頗密の道につきてやむごとなかりける人なり。それに、いみじく力ある人にてありける。僧都、昼寝したりけるに、若き弟子ども、師の力ある由を聞いて試みむがために、胡桃を取りて持て来たりて、僧都の足の指十が中に胡桃八つを<sup>a</sup>はさみたりければ、僧都は虚寝をしたりければ、うち任せてはさまれて後、寝伸びを<sup>b</sup>するやうにうちうむめて足を<sup>b</sup>はさみければ、③八つの胡桃一度にはらはらと碎けにけり。

(注) 比の叡山：比叡山延暦寺をさす。

西塔：比叡山三塔の一つ。

実因僧都：比叡山の僧で、小松の僧都とも称す。

頗密：仏教における教えの種類で、頗教と密教のこと。

やむごととなりける：極めて立派な。

虚寝：寝たふりをすること。

うむめて：うめいて。

(1) 文章中の――線部①の「今は昔」の意味として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、今と昔を比べてみると  
イ、今も昔のままであるが  
ウ、今となつては昔のことだが  
エ、今を昔と考えるならば

(2) 文章中の――線部aの「はさみたりければ」とbの「はさみければ」の行為を行つた者は、それぞれ誰か。

その組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、a	――	弟子ども	b	――	弟子ども
イ、a	――	弟子ども	b	――	実因僧都
ウ、a	――	実因僧都	b	――	弟子ども
エ、a	――	実因僧都	b	――	実因僧都

(3) 文章中の――線部②の「するやうに」を現代仮名遣いに直して、――線部全部をひらがなで書け。

(4) 文章中の――線部③に「八つの胡桃一度にはらはらと碎けにけり」とあるが、このことから実因僧都についてどのようなことが確かめられたか。「――こと」の形になるように、――内に当てはまる言葉を、文章中から七字でそのまま抜き出して書け。

こと

